

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人それぞれに性というものがある。私はどちらかというところ、建築雑誌に載っているような、モダンですっきりと片付いた家よりは、人の暮らしの痕跡が感じられる、ごちゃごちゃした家のほうが好きだ。自分も大正の大震災より前に建った二軒長屋のかたつぽで生まれ育ったこともあるだろう。

友だちの家でも片付いてないほうが落ち着く。あ、いまその椅子のうえ、かたすから、といつてどつさり荷物が移動する。その辺りに座って、鉛筆けずりだの、葉の瓶だの、メガネケースだのの間につまみやグラスを並べて、一杯やりながらたわいない話をするのが好きだ。趣味じゃないのは過剰に飾り立てた家。ドアノブの力バーとか、電話器力バーとか、ごつてり手刺繻のクッションとかは目がくたびれていけない。

私の家もものすごく散らかっている。いつか雑誌の「デスクの周辺」といった連載に出たら、社会学者の上野千鶴子さんから「勇氣ある公開ですね。」と葉書をいただいた。

たしかに。写真では机の上に本が積み上がり、文房具、書類、ファイルが散乱していた。さすがにめげて「鶴の恩返し2つるの機織り場はたおみたいですから。」とそれから公開を勘弁してもらっている。鶴ではないが言葉をついでいる現場を見られたくはない。

しかし私にも転機が来た。二〇〇七年、原因不明の自己免疫疾患で失明寸前まで行き、その後も目の見え方が尋常ではない。もともと探しものを使う時間が長かったうえに、前のようにものの形が目飛び込んでこない。ますます探しものでイライラするようになり、私はシンペン整理をはじめた。五〇代に入って、体も心も、仕事すら転換期である。たちどまりふりかえる中仕切りの時が来ているらしい。

見回してみると家のなかのものは二つに分けられる。自分で買ったものと、外から持ち込まれたものである。頼んだわけでもないのに持ち込まれて自然と増えるものを、さっぱり家から出すことにした。もつたないからと取っておいたきれいな紙や封筒、紙、ビニール袋。これはたまに行くタイの山岳少数民族の子どものところへ持っていけばいい。ここでは字の練習や算数の計算に役立つ貴重品なのだ。私は化粧もしいし、服も靴も大してないが、それも徹底的に減らしてタイに持っていくことにする。

村でフリーマーケットをするのだ。服や靴を一〇パーツ3(約三〇円)とか五パーツとかうんと安く売る。そうすれば施しではなくあちらがお客さん。村人は各自ほしいものしか買わない。それでも商店のある町までは車で三時間かかる村だから、たいてい一〇分で売り切れ。「いつもいいものを持ってきてくれてありがとう。」と言われる。

この目のグアイではもう一度読むことはなからう、という本はあらかたほしい人にあげ、あるいは図書館に引き取ってもらった。余りは古本屋へ。そう、私は活字を捨てることはできない。これで飯を食っているのだから。それが弱みだ。

本を人にあげるといことはすぐエネルギーがいる。本というのは一番個人的な商品で、マヨネーズやアイスクリームのような大量生産大量消費品ではない。捨てることとまた出会うとは限らない。いっぽう好みでない本はどんな名作でも、ベストセラーでも、いらぬものなのである。かと思つたまたまさしあげた本を読んで、世界が広がったとか、人生が変わったとかいう人もいる。原稿を書き、本にするまでの苦勞を知っているから、自分史だろうと、句集だろうと、ジビ出版だろうと、むしろ人生に一冊の本をようやく出した人の本のほうが捨てられない。それが悩み。

だけど捨てられないということが人情じゃないか、と最近では思ひ始めた。世の中、捨てる技術や、断る手口の実用書が花盛りである。自分一人の人生の収支を考えれば、捨てたり断ったりしたほうが合理的だろう。みんななんとばんばん捨ててミガルになり、その時間や空間をほかのより「有意義」なことに使っていることだろう。しかしその有意義なことというのが、権力やお金を持っている、利用できる人に近づくことだったり、上昇(キャリアアップ?)するのに必要な語学や資格を身につけることだったり、頭のいい人だけを集めた異業種交流会で名刺を配ることだったりするのなら、そういうのはせめて、さもない感じ。まったく興味はない。

この前、タイの奥地に行つたとき、有名国立大学からケンシユウFにきている男の子がいた。とにかく弁は立つ。英語もなんとかしゃべる。目は輝いているし、一見やる気があるので、担当教授やNGOなどのいろんな人の紹介をたどつてそこに来ることができた。しかし、彼はちつともそのことをわかつて、恩義を感じてもいなかった。自分の能力でアジアをまたにかけているという口ぶりだった。しかしよく見ていると口ほど体は動かない。人に何かしてもらうのは当然だが、面倒くさいことは嫌がり、人の感情は読めず、人のために何かする気はないと見た。環境だ、国際支援だといったところで、所詮自分の自己実現の手段でしかない。そんな若い人が増えている気がする。私に言わせりゃ、ただの恩知らず。

何か捨てるものを間違えているのではないか。彼がどんどん「削除」しているのは「自分の役に立たない人の縁」。しかし社会とはさまざま人間のアンサンブルであつて、そこには理解の遅い人も、お金のない人も、体の不自由な人も、仕事のない人も、年老いた人も、愚痴っぽい人も、仲間に入りたいたい人も、いじめられている人も、シヤの狭い人もいる。その中に自分は生かされてどうにかやっているということがわからないと、そもそも社会は成り立たない。

夏目漱石に「道草」という小説がある。漱石は本名を金之助きんのすけといい、小さなころ塩原という家に里子に出された。チヨウじて家庭を持ったあとも、その養父は零落してやつてきて、金をせびる。縁を切りたいが、かつて育ててもらっただけに、切る根拠がない。「人間の運命は中々片かないもんだな。」と主人公の健三は慨嘆する。「彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職になろうとしてならずにいる兄の事があつた。新しい位地が手に入るようでもまた手に入らない細君の父の事があつた。(中略) そうして自分と是等の人々との関係が皆なまだ片付かずにいるという事もあつた。」

わたしは捨てる手を止める。一緒にモンゴルの星空を見た人がくれた絵。ラオスの市場で赤ん坊を背負った女性から買った布。パパ死んだ、ママいない、という少年から買った、おそらく偽物のアンコールワットの壁画の拓本、スイスのおばあさんからもらった毛糸のソックス。二度と会わないだろう人との縁。その「片付かなさ」の中を生きるのが人間のシユクメイではなかるうか。

(森まゆみ『おたがいさま』による)

*注 かたす——かたづけること。

『道草』——夏目漱石の自伝的小説。

細君——妻。

問一——線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二——線部1「勇気ある公開ですね」という言葉からどういうことがわかりますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア あこがれている イ いらだっている ウ からかっている エ ほめたたえている オ やつかんでいる

問三——線部2「鶴の恩返し」の機織り場みたい」とありますが、どういう場所のたとえですか、答えなさい。

問四——線部3「服や靴を安く売る」とありますが、筆者はなぜ無料ではなく安く売るのであるのか、自分の言葉で理由を答えなさい。

問五——線部4「それが弱みだ」とありますが、この部分にこめられた筆者の思いとして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア その「弱み」は、職業柄改めることはできないのだと考えて、受け入れている。

イ その「弱み」は、目の病気にとって大敵であるので、大いになげいている。

ウ その「弱み」のおかげで今の職業を続けられるようなものだと考えて、感謝している。

エ その「弱み」のせいで図書館や古本屋に迷惑をかけることになるので、申し訳なく思っている。

オ その「弱み」こそが片付けられない一番の原因であるので、何とかしなければならぬと思案している。

問六——線部5「自己実現の手段」とありますが、どのようなことですか。これより前の部分から具体例を一つ答えなさい。

問七——線部6「わたしは捨てる手を止める」とありますが、これはなぜですか、説明しなさい。

問八——線部「夏目漱石」の作品を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 銀の匙 イ 蜘蛛の糸 ウ 清兵衛と瓢箪 エ 山椒大夫 オ 坊っちゃん

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ときどき氷枕をつくる。

寝苦しいからとか、熱があるからとか、とくに理由があつてのことではない。季節に関係なく年にほんの何度か、虫がこぞつて「氷枕をおくれよう。」と合唱するので、そのときは逆らわれない。むかし覚えた秘事を、いまだに忘れることができないのである。

熱で火照つた赤い顔をして、氷枕を母から受け取る。べろりと分厚くて平たい茶色のゴム製。口のところが金属のクリップでばちんと挟んで止めた平たい袋状だ。去年から使いたしたのは湯たんぼとしても使えるシリコン製で、おなじシリコン製のキャップをぎゅつとひねって閉める。どつちにしても、氷枕を持つと、少し動かしただけで水と氷がいつせいに移動してうごめき、まるで内部に生き物を飼っているようだ。

いつもの枕をはずして、その位置にべたんと置き、そろそろと頭を置いて冷気に馴染んだら、さあ。右に、左に、ゆつくりと頭を振る。

無数の氷の破片が散らばったり、拡散したり、また集まったり、からこる鳴る。こつそり鳴る。目を閉じてひとりで聞くうち、頭と氷枕の境界線が消えはじめ、発熱中のときなど、すぐさま朦朧となれた。右、左、右、左、頬をくつつけたり離したりしながら氷の転がる音に集中していると、ほどなく吸いこまれて遠い遠いところへ行く。ノンちゃんに乗った雲のうえとか、トムが歩いた真夜中の庭とか、「兼高かおる世界の旅」で観た外国とか。

でも、いまはずいぶん違う。近い場所、それもごく近所のことばかりしきりに思う。

暑苦しい真夏には用なしたつたのに、それこそ初秋の虫につられたのか、久方ぶりの「おくれよう。」の合唱に背中を押されて九月に氷枕をつくった。製氷器一個ぶん、十二個。ひとつずつ指でつかみ、狭い口に落とすと、落とす入れてから水を満たした。

部屋の明かりを消し、頭をときどき振って頭蓋に反響する音に耳を澄ます。と、スローモーションのように一軒の家が崩れる様子が現れた。シヨベルカーが柱や壁に突進するたび、地煙がわつと巻き起こる。

それは、おもちゃみたいに見える小さな木造の二階屋だ。夏場はヒョウタンやヒルガオが外壁を覆い尽くし、秋から冬場は剥けた空色のペンキがむきだしになった。なぜか表札はない。つねにひっそり閑としていたが、二年ほど前に一度だけ、腰の曲がった白髪のおばあさんがプランターに植わったヒョウタンの根元に水やりをしている場面に出くわしたことがある。肌色の長靴下の足が、流木みたいにサンダルの中で泳いでいた。

じつはその三年ほど前からずっと、折に触れ、台所の磨りガラス窓を眺めてきた。角に面した家だから、道を曲がるたび古い磨りガラスの脇を通ることになる。おもちゃじみた家にふさわしく、窓だつて四つ切り画用紙ほどのミニサイズだ。その窓枠に、調味料の影があった。

醤油。みりん。酒。はちみつ。少し離れた位置に台所用洗剤が一本。

調味料がたった四つだけ。おばあさんの姿を見かけるまで、たった四つで料理をまかなうのはどんな人物なのだろうと、やたらと好奇心がうずいた。表札も出ていなければ、外に洗濯物も出ておらず、生活の気配はいつさい伝わってこない。とはいえ、調味料はそれなりに減る。週末に醤油の量がぐっと少なくなっているのを指差し確認したときなど、ああ元氣なのだ、ちゃんと無事なのだと安堵したり、また心配したりを繰り返かえて五年が過ぎた。

ところがこの夏の終わり、夜中に通りかかると、調味料いつさいが消えている。醤油、みりん、酒、はちみつ、跡形もない。いやな予感を打ち消しながら、わたしは突つ立つたまま空っぽの磨りガラスを見つめた。

そこからあとは早かった。家の周囲ぐるりに木枠が組み上がり、ニッカポッカの男たちがやってきた。シヨベルカーが腕を振り回し、トラックが横づけされ、みるみる家は解体された。消えるときはなんでも、いつだつて呆れるほどあつけない。

更地になる前の日、夕方のことだ。また通りかかると、終業時刻に間に合わなかったのか、台所にほど近い柱と壁の残骸だけが立っている。無残だったが、はじめて目にする家の内部に最後の挨拶をするつもりで歩み寄つて、あつと声を上げそうになった。

「だいききなおばあちゃんへ」

崩れかけた壁に、八つ切りの画用紙いつぱい、クレヨンで描いたおばあちゃんの顔。おばあちゃんは家を出るとき、なぜ持ちださなかったのかいぶかしんだが、すぐ合点がいった。えんえん何十年も壁に貼り続けてきた絵だからこそ、すっかり同化して家の魂どうぜんになっていたのだ。その家が消えてしまうなら、魂もいつしよに去るほか道はないだろう。

すぐ近くで、いろんなものが消える。犬小屋。木造アパート。サクラの老木。美粧院。時計屋。蕎麦屋の出前。いのちある小さなものが、少しずつ姿を消してゆく。いよいよ包囲されつつあるということか、近くのもの着々と遠くへ去つてゆく。

ぶるりと頭を振ると、あたしや知りませんよ責任ないし、とばかり、からころと音が鳴る。氷枕は、まだしばらくひんやり冷たいだろう。

(平松洋子「氷枕」による)

*注 ノンちゃん——童話『ノンちゃん雲に乗る』の主人公。

トム——小説『トム・ソーヤーの冒険』の主人公。

「兼高かおる世界の旅」——テレビで放映された紀行番組。

問一 ——線部1「虫がこぞつてく大合唱する」とはどういう様子を言っていますか、説明しなさい。

問二 ——線部2「どつちにしても」とありますが、何と何を指すのですか。問題文中の語句を使って答えなさい。

問三 ——線部3「いまはずいぶん違う」とありますが、どのようにちがうのですか、答えなさい。

問四 ——線部4「肌色の長靴下の足がく泳いでいた」とありますが、「足」が「サンダルのなかで泳いでいた」とはどういう様子を言ったものでですか、答えなさい。

問五 ——線部5「台所の磨りガラス窓を眺めてきた」とありますが、筆者はそこから何を知らうとしてきたのですか。問題文中から五字でぬき出しなさい。

問六 ——線部6「いよいよ包囲されつつある」とは、どういうことを言っているのですか、答えなさい。

問七 ——線部7「あたしや」が指すものを答えなさい。

三 次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

幼な児は詩人

たかとう匡子

まあるい野原のまん中で 1 1
こどもがちい
さな箱を両手でしっかりと抱えている 2
こ
どもはあつちにもこつちにも 2
だつこ
だつこの詩を書き散らすので 3
若い母親は
うれしい悲鳴をあげながら 4
かたつばし
から拾って ポケットに入れていく 5
日
暮れ時の原つばの輝き

こどもは

のなかに

無造作に指をつつこんだ

一枚の葉つばをとりだして ちいさな箱
の中に入れる 猫をとりだしては パナ
ナをとりだしては ちいさな箱の中に入
れる 葉つばはアツバのまま 猫はニヤ
1ニヤのまま パナナはバのまま入れて
こどもは大事そうに箱を抱えながらせつ
せせせせせせ だつこだつこという詩
を書き散らす まあるい野原のまん中で

4
なかなかやるわねえ

こどもが抱えこんだ言葉の箱をのぞきこ
んで 若い母親は上機嫌 その至福 言
葉とは一体なんだろう 指を夕陽まみれ
にして しだいに重たくなっていく こ
どもが両手でしっかりと抱えたそのちいさ
な箱は 若い母親が伝えていくものの始
まり

問一 —— 線部1「ちいさな箱」にこどもは何を入れるのですか。一語で答えなさい。

問二 —— 線部2「だつこだつこの詩を書き散らす」とはどういうことですか。わかりやすく答えなさい。

問三 —— 線部3「葉つばはアツバのまま」とは、こどものどのような様子を表しているか、答えなさい。

問四 —— 線部4「なかなかやるわねえ」とは、若い母親のどのような気持ちを表していますか、答えなさい。

問五 —— 線部5「言葉とは一体なんだろう」という問いかけの答えにあたる部分を、詩中から二十字以内でぬき出しなさい。

問六 —— 線部6「言葉とは一体なんだろう」という問いかけの答えにあたる部分を、詩中から二十字以内でぬき出しなさい。

